

真宗大谷派（東本願寺）大谷暢顯門首御親修
 旭川別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要
 記念事業本堂等改修工事完成奉告式
 期日 2014（平成26）年6月19日～22日

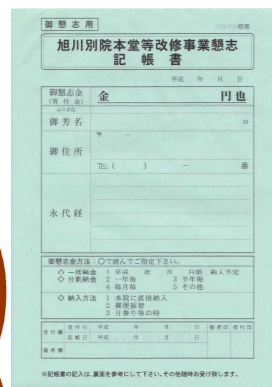


漆を丁寧にこねる、もしくは混ぜています。何度も繰り返して、滑らかな漆を作っています。



現場をビニールで覆い、ホコリを立てないように気をつけながら作業をしています。

記帳書の提出はお済みですか？



旭川別院は、私たち「門徒」のお寺であり、一人一人の力添えで支えられています。
 未だ記帳書の提出が滞っております方々には是非ともお願い申し上げます。

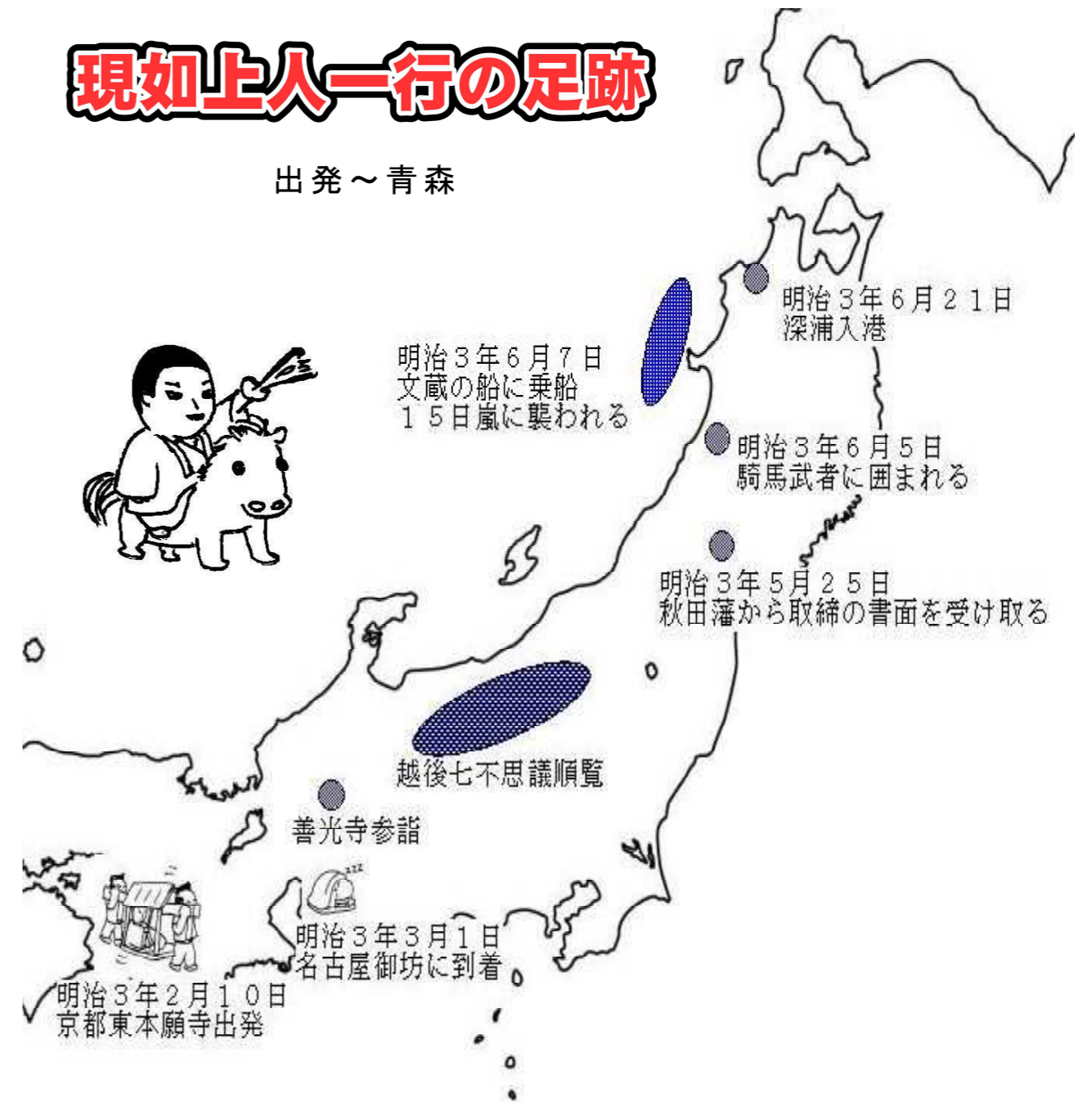
調査員：草部・垣原・横井よ・長尾・高橋
 2012年11月4日作成

別院しらべ隊

調査報告書No.26 身を粉にしても報ずべし

現如上人一行の足跡

出発～青森

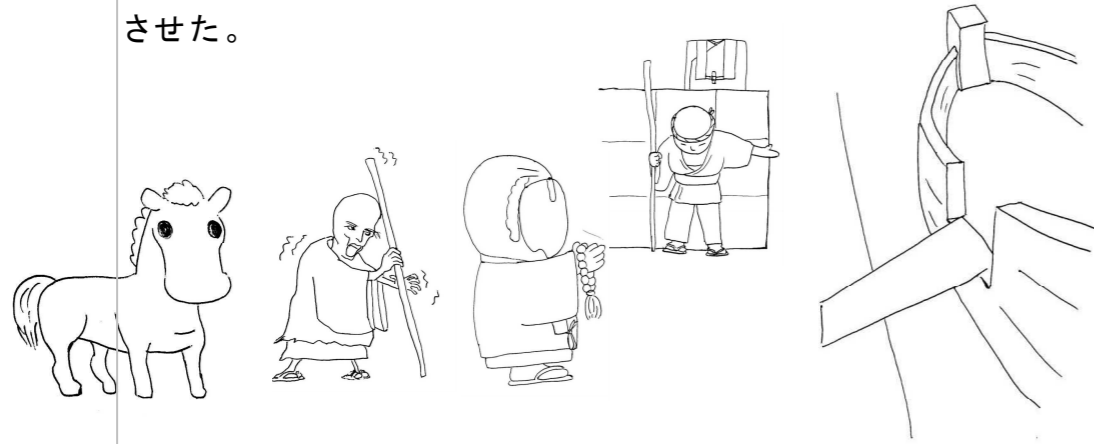


江戸末期～明治初期⑤

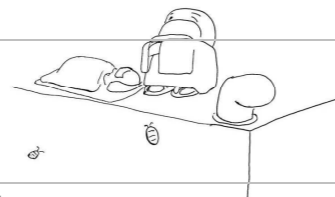
明治3年(1870年)6月7日

広誓寺に移って北海道上陸までの旅程の名案もなく困り果てていた。

この時、加賀国小松の下郷屋長兵衛の船(帆船)が北海道江差港より海産物を積込んで帰航の途中、本荘近くの子吉川河口に停泊していた。船頭の文蔵は東本願寺の門徒であった。現如上人一行の難儀を聞くと、文蔵は船の持ち主に叱責される事があつたら全責任を自分が負う決意の下に積荷を全て降ろし、一行を乗船させた。



6月9日~11日



風待ちのため、子吉川河口に停泊

6月12日

早朝出港

6月15日

北海道渡島半島の山々が微かに見え始めた。この頃より台風が来襲し、迅雷風烈、船体鳴動、何度も覆没の危機を向かえ、さらには飲料水は欠乏し、一行は船酔いに非常に苦しんだ。

そんな中、現如上人だけは泰然自若としていた。

6月21日

6月23日

6月25日

6月26日

ようやく陸奥国深浦に入港。

浄念寺に移る。

弘前真教寺に宿泊

津軽藩知事が真教寺に来訪。同日現如上人は弘前城内津軽侯邸へ答礼に赴く。

本山より随行されていた一老泉竜寺祐之が、連日の激務にて過労のところへ乗船、稀有の大難風に遭い、船中にて吐血、衰弱して足腰が立たなくなってしまった。現如上人も深く憂慮され、同行を止めて弘前にて療養することを勧めた。泉一老は真教寺の寺中正蓮寺にて療養、更に正蓮寺壇頭山田儀八宅にて療養に努めたが、8月6日67歳命終。8月8日密葬。山田儀八は泉老

僧の護法の誠心に感動し、正蓮寺境内に石碑を建てた。

